

一重孔希の白磁

岡部由紀子

一重さんが白磁の大物をろくろで挽いている場面を何遍も思い描いているのに、いまだ撮ることをためらっている。覗いてはいけない営みのように感じているからだろうか。先日、思い切って一重さんに尋ねたら、「磁器の土で大物を挽くときは、全神経を集中しなければならぬんですよ。少しでも気が散ればできません。」と、あっさり断られた。

白磁のピッチャー花瓶の中に手をいれて、そこに残る陶人の右手の指の動きをなぞり、花瓶の外側に触れて左手の指の跡をたどれば、磁土の塊が水を得て生き物となり、まるで女体のような形となるさまが浮かんでくる。ろくろの上での創造は、息を詰めた一瞬の出来事だろう。

我が家の日常には、かれの白磁が溶け込んでいる。ピッチャー花瓶は、家の周りに育つ樹木や草花を抱いて嬉しそうだし、器は料理を盛られるのが待ち遠しそうだ。かつて冬の仮面祭を訪ねて、三か月間オーストリアの田舎を一人でうろついたことがあった。その折、一重さんの個展の案内状のために旅先で書いた文が最近出てきた。

「一重孔希さんの器に寄せて」

たちのぼる湯気の陽炎とたわむれ
赤いトマトが影を落とすと 少しはにかみ
汁のぬくもりには上気して
氷水には透明な汗を流し
酒にその白さを重ねて酔う
そんな器がなつかしい旅の日々です。

(1995年 チロルにて 岡部由紀子)



今でも、器との幸せな関係は続いている。